

県花ノジギクについて

室 井 綽

昭和28年の春、各県に県花、県樹などの創立がはじまった。本田正次博士の関係指導する「NHK」や「東京植物友の会」などに東京へ呼び出されて兵庫県について助言を求められた。

各県では県花の制定の趣を伝えられ、もし兵庫県で推すことにするとどの植物がよいか例をあげ特徴をあげてほしいなどが伝えられた。

まず、兵庫県で県花に推すとすると何がよいか、その推す理由、美しさ、栽培しやすさ、県民としてのつながりなどを列挙してほしいとのことであった。

それで、ちょっと考えてみると野草ですばらしく美しく、群れを作って咲く花、さらに盆栽や庭園で栽培しやすく、古くから栽培されているものとなるとノジギクをおいて外にはないと信じていた。

古くから県下で知らされているものとしては、特産に近いコヤスノキ、あるいはチトセカズラとナツアサドリなどがあるが、これらは樹木で開花までに数年から10年もかかるから大衆的なものでノジギクがよいと考え候補に推薦した。

秋のノジギクの開花のころ、当時の大塩あたりの塩田の畦や山麓、さらに瀬戸内などの山麓のノジギクの咲いたものや田の畦の満開のものを見ると誰でもそのきれいに驚き歩く足を止めて眺めたものである。今日でも大塩地方の秋の山を歩くときと野生のすばらしく美しいものが見られる。

さらに、山野草の好きな人々がノジギクを盆栽仕立や群生、樹木仕立てにして見せられると、まったく老木の感じを出したりして驚きを感じたものである。そのころ、牧野富太郎博士、県人では山鳥吉五郎や川崎正悦の両先生などもノジギクの開花の秋には新聞紙上で推薦して下さったりした。また、当時、三先生によるキバナノジギクの発見などは県民を驚かされ脳裏に刻みこまれた風景である。

それらを綴って、このノジギクを兵庫の県花の見本に廻したところ、続々と日本中の各県花が完成した。兵庫県民のだれもが私のノジギク推薦に対して賛意を表してくれ、兵庫県では早速、誰いうとなく新聞紙上に推薦された。また、早速、山陽電車大塩駅ではノジギクを構内に植えて「県花ノジギク」の立札まで立ててくれた。

続いて姫路市では正勝氏を「ノジギク保存会会長」に任命し、工会長を中心に木下利夫、東光一、木下義人の諸氏などを中心にして県下を歩かせ、ノジギクの花と葉

の各型を集めさせ、大塩駅南の市有地の広場に栽培の見本池2アールほどの見本園を作られた。さらに後年、この見本園は大塩の現地に移された。1950年には一部を「日本触媒」の広大な土地に移された。そしてここで増殖され県下の各学校をはじめ、公園などに分譲され広められた。

さらに山陽電車では大塩駅に続いてノジギク保存会の「県下ノジギク」(注)の36ページの写真に見るような栽培を須磨鉢伏山の浦上遊園地に多量のノジギクを植えて大衆に展示して、県花として広めた。

これらは県広報課、姫路市公園課をはじめ県下の植物研究者なども大賛成していただき県花として承認するまでもなく県花に推されてしまった。

その後、昭和28年に筆者の勤務校である県立神戸第二中学校の生物教室に卒業生佐井秀行氏がこられ、ノジギクの県花として、設立の意義を求められた。

このノジギクは正式(?)ルートを経ずに県民が推して異常なまでに盛り上がった現在どうすべきかについてご相談にこられたが、県花として盛り上がったのをみると、黙認して県花として採用する以外に方法のないことであろうとの結論になって、お別れしたことであった。

考えてみると、県民の皆様の熱意によって盛り上がったことであり、正視する以外に方法はあるまい。してみると、不思議な「県花ノジギク」である。

付記

「県花ノジギク」については県生物学会編『県花、県鳥、県樹』(1961)などが決定の形式で公布されたものであるので参照願いたい。

注. 兵庫県生物学会編; 「県花、県鳥、県樹」(神戸新聞、ノジギク文庫発刊)(1966)
(2003年1月22日)